

インタビュー

# 「明日を拓く」

第227回

パチンコ産業は、「大衆娯楽」として楽しめるためにさまざまな努力を続けているが、依存(のめり込み)の問題が常につきまとっている。遊技機の内容、営業のあり方などが問われることが多いが、依存の実際はどの辺にあり、どういう課題をはらんでいるのか。

今回は、パチンコ依存の電話相談で実績を上げているリカバリーサポート・ネットワークの代表理事で、精神医学の専門家でもある西村直之氏にお話を伺った。

ゲスト

リカバリーサポート・ネットワーク代表理事

# 西村直之 氏

時にはユーモアたっぷりに実情を話した西村さん

# 1円営業だからといって 依存が減るわけではありません

——リカバリーサポート・ネットワークを、西村先生がはじめたのは、どのような経緯からなんですか。

**西村** ホールの駐車場で乳児の

車内放置事故が続き、パチンコ業界が世間の注目を集めた事がきっかけでした。全日遊連で活動する

九州の若手経営者の中で、パチンコホールにおけるさまざまな問題

にみずから対処しなくてはならぬのではなか、という機運が盛り上がり、その中の研究テーマのひとつとして、パチンコ依存症問題が取り上げられました。

横浜市瀬谷区にワンデーポートという依存症問題に取り組むNPOがありますが、そこへ全日遊連

などから講演依頼が来るようにな

たね。

つた。ワンデーポートの中村努さんは、私もたまたま知り合いだつたのですから、それをきっかけに全日遊連の皆さんとも知り合

いになれただすことです。

ただ、全日遊連の皆さんもいろ

いろ研究してはいるが、具体的にどうしたらしいのかというと、よ

くわからないという事でした。当

時は言いながら、当初は、業界

がこの問題で動くというのは、正

直半信半疑のところがありました

ね。ただ、ひょっとしたら大変面白いプロジェクトになるのではないかと言う程度だったんですね。ですから、最初はアドバイスとはいっても、単に「電話相談所」を作つてみたらいかがですか、という

だつたと思います。すると全日遊

電話相談所でも  
と言ったら  
「ではそれを」と

進行形です。重要なのは、実際の問題にかかわり当事者の回復支援をしていくところと、入口のようないる業界のところと、この3者が

同時に関わり続けており、その中で、いろいろ調整しながら進んでいます。いるということだと思います。

にしむら・なおゆき

1965年生まれ。福岡県出身。  
琉球大学医学部卒。1999年より(医)卯の会あらかきクリニック院長。2006年ぱちんこ依存問題相談機関リカバリーサポート・ネットワークを設立、2009年NPO法人化し代表理事に就任。精神科医。

聞き手=「日遊協」編集部

## 本人と話を できることが 大切なポイント

——リカバリーサポートが出して  
いる「2011年版 パチンコ依  
存症問題 電話相談事業報告書」  
でも、「相談者の相談経路」の項目  
では、ホール内のポスターを見て  
電話相談にかけてきたというのが  
65%で最も多いですね。

**西村** 私たちが知りたいのはどん  
な人がどんな悩みを抱えているの  
か、本当にリアルな現実です。だ  
からこそ、業界の人たちも納得し  
て、協力していただけるのではないか  
と思います。新聞などのメディア  
で相談を募れば、多くの相談  
が寄せられますが、それはほとん  
どが本人ではなく家族なんですね。  
話の内容も周囲の人の間接的な、  
曖昧な話しか出なくなってしまう。  
これでは実態とちょっと違うデー  
タばかり集まってしまう。しかも、  
本人には伝わらない。

しかし、電話相談にすると、本  
人が電話かけてくる率は非常に高  
い。そうすると、直接本人と会話  
できるし、何が本当に困っている

のが全部把握できる。私がそれ  
まで関わってきた依存問題に関す  
る経験からすると、パチンコなど  
の日常娯楽の世界では、窓口の敷  
居を低くすれば、本人が進んでき  
てくれる。

## ポスターによる 取り組みは 早い対応ができる

実際、こうした依存関係の電話  
相談で、本人からの相談というの  
が7割近くを占めるというのは、  
どこにもありません。なおかつそ  
れがホールのポスターを見てから  
だというのは、ほかに例がありま  
せん。これはまったく新しい支援

のやり方なのではないでしょうか。  
パチンコ問題だけではなく、他の  
依存問題の支援にも使えるような  
新しいやり方のではないかと自  
負しています。どんな問題だっ  
てひどくなる前に、相手に伝わりや  
すいところに入口を設け、手を伸  
ばしやすいカタチにすれば、もつ  
と早い介入ができる。これは、か  
なり大きなチャレンジになると思  
います。

## 常時3人体制 会話の中から 本人が気づく

——相談件数は月にだいたい10  
0件程度ですか。

——

ですから、さまざまな経験をし  
ている人間が相談に乗る必要があ  
ります。初めは、皆さん自分の状  
況をそれほど深刻に考えていない  
方が大半ですが、さまざまな会話  
を重ねる中で、そういう世間と自

身の温度差に本人が自分から気付  
いてもらう、その気になつてもら  
う、ということを主眼においてい  
ます。

**西村** そうですね。年間で120  
0件くらい。昨年は震災の影響や、  
ポスター配布の遅れなどで、少し  
落ちましたが、だいたい月100  
件くらいのペースです。

——相談に対応されているスタッ  
フの方はどのくらいますか。

**西村** 常勤が2名で、非常勤が1  
名です。非常勤とはいっても相談  
時間はずつと出てきてもらつてい  
ますので、電話対応は常に3人の  
態勢で行なっています。いずれも、  
こうした活動に、習熟したベテラ  
ンの相談員をそろえています。依  
存が進み、悪くなつてしまつた状  
態では、実はこちら側でできるこ  
とというのは少ないんです。逆に、  
窓口を広げ、敷居を低くすればす  
るほど、問題の範囲はかえつて広  
くなつてきます。



## インタビュー「明日を拓く」

リカバリーサポート・ネットワーク代表理事 西村直之氏  
1円営業だからといって 依存が減るわけではありません

——電話をかけてくるのは、どういう人が多いんですか。

西村 若い人では、ホールのポスターの文言を見て「オレ、これに当たはまるけど、マズイかなー」と言ってくるのや「借金はちゃんと返しているんだけど、このままいいのかなー」といった相談が多いですね。実際、借金をしている人は、相談者のうちの4割くらいですが、家計内からの持ち出し、家計内の借金、つまり生活費に使うべき給与やボーナスに手をつけてしまっている人というのは86%くらいに上ります。

——「パチンコ続いていると楽しいが、不安になる」というこの程度の方は、したがって年間約1000人から1200人の相談者のうちの800人から1000人くらいいるということですね。

一方、もっと激しい人たちも中にはいます。ただ、こういう人たちは、電話相談で何かを言つても、

**究極に行く前に遊び方を変えて随分楽になる**

西村 多いのは、「若い息子がの

### 何年も悩んでその末にくる家族からの相談

それですぐ問題が解決できるというものでもありません。若いときから何か大きな問題を抱え込んでいるという人もいます。こういう人は、おそらくパチンコをしたからどうと言ふことではなくて、それがきっかけになつただけではないかと思います。

尻拭いをしているが、大丈夫だろうか」というような母親のケースですね。「夫は、高齢になつて、お金ばかり使って、将来が不安だ」という主婦、「年金暮らしの母親が全部パチンコにつぎ込んでしまうのでどうにかならないか」という娘さん、こんな方も多いようです。

家族の方の相談で特徴的なことは、相談に至る前に何年間もおそらく悩まれたのだろうけど、皆さんほとんどこういう窓口で相談したことがないということです。僕たちも、最初驚いたんですけど、本人も含めて、この問題で第三者に相談したことがないという人は、

### その後について追えるかは難しいところ

——相談によって、うまく依存から脱出できた人はどのくらいいますか。  
西村 僕たちもそれを知りたいと思っていますが、電話相談では、まだなかなかそれはつかめています。  
——たしかに、うまくいったらまた電話相談にかけてくる必要性はありませんからね。

**西村**

依存から脱却できた人が、また気軽に電話してきたりいいな、とは私たちも思いますが、匿名相談というのは、そこは仕方がない。ただ、私たちの匿名電話相談から、どのような経路をたどって、回復したのか。そうした情報のフィードバックは重要かと思います。が、まだそこまで追えていないというのが現状です。

### 入口から出口へ 一貫した枠組を作る必要がある

——先生は、将来的には、ネットの活用や、面談中心の相談システムを、考えているそうですね。

西村 いざれは、そういう方向にも進んでいきたいと考えています。

ただ、現在、私たちは、電話相談システムの出口としてワンデーターサポートやGA（ギャンブルーズ・アノニマス）などのNPOの活動に期待しているわけですが、こうした出口を担う機関の充実がはかれないと、私たちの電話相談も十分な力を発揮できません。

現状は、しかし、財政的な問題もあって、出口機関がいまだにそ

う強くない。また、入口と出口だけどんなに頑張っても、途中経路のさまざまなサポートが必要です。

途中経路には、ガードレールも必要なら、そっちへ言つてはいけませんというような道案内も必要です。今、ここが非常に弱い。援助者や支援してくれる人たちの枠組みを、より社会のニーズにあつたものに変えていく必要があります。そのために、各地でそうした援助者を集め、ともに考えるセミナーを開く活動などもやっています。

### 21世紀会には 成果を利用して いただきたい

——特にパチンコ業界に期待することというのは、どういうことですか。

西村 昨年、21世紀会に集まる業界14団体が、本格的にこの問題とかかわってくれるというお話をいたしました。これはとても大き

### ファンが多ければ かならず問題を 抱える人がいる

い第一歩だと思います。次は、皆さんにこの成果を利用してもらうということが大切なではないかと思います。たしかに資金援助を初め業界のさまざまご協力など

によつて、いろいろなことができるようになりました。ただ、これからは、それだけではなくて、これまで積み上げてきたデータを利

用し、新しい施策に生かしてほしいと思つています。

これまででは、業界から呼ばれることはほとんどなかつたんですが、最近では、さまざまな会合で話をし合おうとする動きが出てきました。そういう要望が寄せられています。そういうところでは、私たちも、「1円パチンコの普及でめり込みは減少したか」というと、そんなことはない」とか、「貸金業法が改正され、安易に借金で遊ぶことはできなくなつたはずだが、実はいまだに月に20万円も使つてしまふ人は後を絶たない」とか、そうした現実をしつかりしたデータで私たちは提示できます。

### 社会貢献を バラバラでなく 再編整備して

——本来はパチンコ以外の問題が原因ということですね。

西村 パチンコでなければ、ただのうつ病という人は、たくさんいますよ。パチンコしなかつたら、胃潰瘍になつていたかもしれませんという人もいます。ただ、こうした人たちが、たまたまパチンコのもつ射幸性に触れることによって、急にその本来の健康でない部分、中には明らかに病気とされる部分が刺激され、問題を引き起こすことがあります。

## インタビュー「明日を拓く」

リカバリーサポート・ネットワーク代表理事 西村直之氏

1円営業だからといって 依存が減るわけではありません

こうしたパチンコとの不幸な出会いについて、サービスの側がはたして背負うべきものであるのかどうか、それは議論の別れるところではあるでしょう。もちろん、パチンコには、そうした不幸な出会いばかりではなく、プラスの部分もあります。ただ、その結果には一定の社会的リスクが発生するわけで、それは、責任論ではなく、社会に対する優しさ、一定の貢献であるというふうに考えていただきたいですね。



依存問題の核心をていねいに語る西村代表理事

——業界としては、今後、依存症問題に対して、どのように向き合っていくべきでしょうか。

西村 たとえば、業界が一生懸命支援している母子家庭の子どもたちですが、やはり心のどこかに寂しいという感情を引きずっているケースが多い。こうした子どもが成人して、ちょっと刺激の強い広告などに触ると、つい引き込まれてしまう。

業界がせっかくその健全な成長を願つてサポートしてきた子どもたちが、業界によつて傷ついてしま

ますが、カタチは違えど、社会的なリスクの軽減に大きな役割を果たしていることは明らかです。ただ、残念ながら、それらの活動は、各企業ばらばらで行なわれており、一部の業界に対する無理解の原因になつてもいます。これらを総合して、依存問題も含めて、業界の社会貢献活動の大きな枠組みとして、再編整備してい

ます。なまづく人が出てきてしまう。そのリスクの責任は個人の問題です。ならばやめてしまえばいいかというとそうでもない。娯楽のない社会というのは、これも大きなストレスです。社会的に見れば小さな個人の問題ですが、個人や地域社会にとつてはやはり大きな問題なんですね。

私たちの活動は、そうした問題をカバーしていく活動です。業界にとつても、地域の健全性を保つため、そうした問題に優しく目配りする。こうしたことが、ひいては地域社会との末長い共存関係を作り上げていくことにつながるのではないかと思います。

——なるほど。依存問題への取り組みは、業界の将来のビジネス構築へのヒントもあるようですね。本日は、長い間、ありがとうございました。

つたら、社会にとつても業界にとつても大変有意義な活動になるのではないかと思います。

**社会へ優しく  
目を配ることが  
大切なのです**

まうのは大変残念な現実です。射幸性をことさら低くする必要はありません。過剰にならないように気を配るべきなんです。それによってユーザーが疲弊してしまわないようにするべきではないでしょうか。ホールにとつては、本来、10年、20年と長くお付き合いいただける人なのかも知れません。

世の中に娯楽はなくてはならない楽しみです。だからどんな社会にも娯楽はあります。しかし、楽しめというのは、どうしても度があり過ぎてしまう人が出てきてしまう。

そのリスクの責任は個人の問題です。ならばやめてしまえばいいかというとそうでもない。娯楽のない社会といふのは、これも大きなストレスです。社会的に見れば小さな個人の問題ですが、個人や地域社会にとつてはやはり大きな問題なんですね。

パチンコホールが、地域の子どもたちの野球チームやサッカーチームを支援したりされていますが、こうした観点から見ると、大変いい理にかなつた活動といえると思います。

**多様な楽しみを  
提供することが  
問題を防ぐと**

——本誌で連載中の篠原菊紀先生のお話によれば、ギャンブル依存のかなりの部分は遺伝によるところが多いということです。

西村 パチンコホールに来客されるお客様の中には、そうしたリスクの高い方もおられるのだという事を前提に考えれば、それに早く介入して、問題が大きくなるのを防ぐ事が重要です。また、問題を抱えている人は、もつと別の楽しみ方を提案することもいいかもしれません。娯楽の多様化を図ることですね。